

## 過剰に痛みの変化に気づくことで ADL・QOL は低下する

### —日本語版 Pain Vigilance and Awareness Questionnaire (PVAQ) を用いた検討—

重藤 隼人, 米谷 俊輝

医療法人社団 昌樹会 ウツミ整形外科医院

**key words** 日本語版 Pain Vigilance and Awareness Questionnaire・過剰な警戒心・痛みの変化への気づき

#### 【はじめに, 目的】

慢性疼痛患者では、痛みの症状に影響を及ぼす要因の一つとして痛みに対する注意・過剰な警戒心の関与が示唆されており、過剰な警戒心が日常生活活動 (Activities of Daily Living; 以下 ADL) および生活の質 (Quality of Life; 以下 QOL) の低下に関連していると考えられている。過剰な警戒心は身体に対する脅威刺激から回避する機能の起源であり、不安や恐怖、破局的思考などのネガティブな情動や個人の懸念等が総合的に影響して起こるとされている (Corombe, 2005)。過剰な警戒心と痛みとの関連について、先行研究では、過剰な警戒心は痛み強度の増加 (McCracken, 1997) や自己効力感の低下 (Leeuw, 2007) に影響を及ぼすと報告されている。臨床では、痛みのことばかり気にしすぎて活動に対して過剰に警戒している症例や、活動への不安感はあるが疾患や手術等の誤った情報や指示等で用心して活動を過剰に制限している症例等、様々な要因で過剰に警戒して活動を制限している症例が散見され、過剰な警戒心の評価は必要性があると考えられる。欧米では、痛みへの注意・過剰な警戒心を測定する自己記入式尺度として Pain Vigilance and Awareness Questionnaire (以下 PVAQ) が広く用いられており、日本語版 PVAQ も作成されている (今井, 2009)。日本語版 PVAQ は「痛みへの注意 (以下 PVAQ 注意)」, 「痛みの変化への気づき (以下 PVAQ 変化)」の 2 因子で構成されている。PVAQ 注意は破局的思考と同様の因子であり、PVAQ 変化は心理的因子と異なる因子であることを示唆されている (Roelofs, 2003) が、PVAQ 注意・PVAQ 変化の ADL・QOL への関与は不明である。そこで本研究では、日本語版 PVAQ を用いて、PVAQ と ADL・QOL および心理的因子との関連について検討し、評価における PVAQ の特性を検討した。

#### 【方法】

対象は当院通所リハビリ利用者 50 例 (男性 7 例, 女性 43 例, 80.3±7.8 歳) とした。問診票の理解が困難である利用者は除外した。評価項目は痛みの強度 (Numerical Rating Scale; 以下 NRS), 心理的因子 (Hospital Anxiety and Depression Scale; 以下 HADS, Tampa Scale for Kinesiophobia; 以下 TSK, Pain Catastrophizing Scale; 以下 PCS), 痛みへの注意 (PVAQ), ADL (Pain Disability Assessment Scale; 以下 PDAS), QOL (EuroQOL; 以下 EQ-5D) を測定した。統計は PDAS, EQ-5D を従属変数とした重回帰分析で評価項目の因果関係を検討した。また、PVAQ 注意, PVAQ 変化と心理的因子との関連を Pearson の相関分析を用いて相関関係を検討した。有意水準は全て 5% 未満とした。

#### 【結果】

重回帰分析の結果、ADL に影響を与える因子として、PVAQ 変化 ( $\beta=0.46$ ), NRS ( $\beta=0.29$ ) ( $R^2=0.36$ ,  $R^{2*}0.33$ ) が抽出された。QOL に影響を与える因子として、PCS 拡大視 ( $\beta=-0.31$ ), NRS ( $\beta=-0.30$ ), PVAQ 変化 ( $\beta=-0.29$ ) ( $R^2=0.43$ ,  $R^{2*}=0.39$ ) が抽出された。相関分析の結果、PVAQ 注意と PCS 反芻・拡大視・無力感に中等度の相関関係を認め、NRS, HADS 不安, TSK に弱い相関関係を認めた。PVAQ 変化と心理的因子は相関関係を認めなかった。

#### 【考察】

本研究結果より、ADL・QOL 双方に関与する因子としては PVAQ 変化が抽出された。PVAQ 注意と心理的因子は相関関係を認め、特に PCS は他の心理的因子と比べ高い相関関係であった。一方で、PVAQ 変化と心理的因子は相関関係を認めなかった。以上のことから、PVAQ 注意は心理的因子が関与した過剰な警戒心を、PVAQ 変化は心理以外の因子が関与した過剰な警戒心を抽出していることが示唆された。PVAQ 変化に影響する心理以外の因子については、今回の研究では検討していないため今後の検討を要する。Roelofs ら (2003) は、PVAQ 変化は痛み体験に基づいた対処方略を反映していると述べており、Goubert ら (2004) は、PVAQ は神経質など個人の性格とも関連があると報告している。先行知見も踏まえると、PVAQ 変化に関与する心理以外の因子は、個人の性格や環境、痛み体験等に基づいて過剰に警戒した対処方略を反映している可能性が考えられる。以上のように、PVAQ は下位因子も検討することで、心理的因子や心理以外の因子も含め、包括的に過剰な警戒心を抽出できる点に特性があると考えられる。

#### 【理学療法学研究としての意義】

本研究で、PVAQ が ADL・QOL に関連することが示され、下位因子である PVAQ 変化に関与する因子を今後検討し、心理的因子および心理以外の因子への対応をすることで ADL・QOL の向上につながり得る点に意義がある。